

征 服 王 朝

藤 枝 晃 著

昭和二十三年三月 大阪秋田屋刊
B 六判 一九七頁 價七〇圓

われわれとは全く畑のちがふ一友人が、私の机上にあつたこの書物を手に取つて、先づ「ほうなかなか氣の利いた題名ですわね」と言つた。この題名は、著者がその自序の中で種明ししてゐられるやうに、ウィットフオーゲルの近著『遼代社會史序論』中の用語を採つたのであるが、右の友人のやうに内容を讀まぬ先から感心する人があるくらゐだから、讀んだ人ならば尙さらこのタイトルの方の巧みさに驚かれたことと思ふ。即ち本書は遼金元三朝の歴史を扱つたものなのであるが、ところでその氣の利きかたは、實は題名だけでなくて、寧ろその内容の扱はれかたに於てこそ、大いに發揮されてゐるのである。いや、「氣の利いた」ところでは濟まされぬ。史學者として大きな野心をもつたユニークな工作なのである。その氏の野心とは何か。それは「遼金元史の課題」といふ章に讀まれる。既に氏は『中國史學入門』で擔當された遼金

の項に於て、今後の遼金史研究の方針を示してゐられる。曰く、従來の研究では、常に支配民族の立場からすべてが見られてをり、被支配民族の立場に立つて下から見られたものがない、「別の言ひ方をすると、研究の材料は正史・別史・雜史その他史部の書物ばかりで、集部のものは大して顧みられなかつた。かう言つた立場の、下から見た遼金史といつた研究が、これからは出て來なければならぬと思ふ」。ここに言ふ從來の研究とは、主として滿蒙史家側の研究を指すのであるが、本書ではこれに對して中國史家側の研究を擧げ、並びに批判が加へられてゐる。氏によれば、この兩史家は「おのおのおのおの世界の一面だけをみて濟まして來た」のであり、「いはば一つの川を中にして、その向ふ岸と此方の岸とで、それぞれ逍遙し彷徨し或は驀進しながら、中の流れに足を浸し、或は橋をかける人は甚だまれであつた」。こんな状態では、いつまで經つても本當の征服王朝の歴史は書かれよう筈がない。征服民族の世界と被征服民族（漢人）の世界とが「それぞれの世界を主張して、あるひは調和し、あるひは衝突する。そのデュアリズムの境界線」——常に動搖し、あるひは流れるこの一線の所在を追究することによつて、はじめて征服王朝の歴史は語られることが出來るのである（本書二七頁）。氏はそこでその具體的な方法として「下から見た遼金史」を開拓せんため、上述の方針に従つて集部の資料を正面から取り上げられた。その成果が、質的にも量的にも本書の壓巻をなす「金史のなりたち」である。すなはち元好問

（遺山）を軸として、金史の産れる陣痛の苦しみが、二つの世界とのデュアリズムの消長動搖のなかに、なまなましく描き上げられたのである。

ここで、われわれ中國文學を研究するものに對して、一つの課題が與へられる。元遺山といふ亂離の世の文人は、われわれ文學畑のものにとつては、實のところ史家としてよりは文學者としての比重が大きかつた。もつと端的に言へば、彼を史家としてよりは文人としてのみ讀んで來た。史家としての元遺山の半面を見逃してゐた——ちやうど歴史畑の人たちが文人としての彼の半面を無視してゐたやうに。ここにも一つの川があり、おのおの自分側の岸を逍遙するばかりで、この川に「橋をかける人は甚だまれであつた」のである。そしていま私の視てゐるこの川は、藤枝氏の視てゐられる川と、實は同じものではないのだらうか。これは決して小さな問題ではない。

嘗て吉川幸次郎教授は、列傳や墓誌銘の文章がれつきとした文學のジャンルに入れらるべきであることを主張された。私は思ふ。郭沫若氏の青年期の文學活動のなかで最も優れたものは、詩や創作小説ではなくて、『我的幼年』『創造十年』『反正前後』など一聯の歴史的な自傳的作品であると。この國の優れた文化人は、優れた文化人であればある程、文學者と歴史家とをその一身に同居せしめてゐるのではなからうか。ただそこに比重の差はあるであらう。（むつかしいのは、その比重の衡量のしかたである。しかし當面の問題はまだその手前

にある。このやうな文化人を取扱ふ場合、今までのやうにそれぞれの立場から二つに切り離して済ましていいものか。近世に例を取れば、歐陽修やこの元遺山、また金史の「かなしき」完成者歐陽玄の詩文集、或は『廿二史劄記』の著者の詩文集、このやうな文學作品を、今までわが國の東洋史學者で正面から讀んだ人は何人あらうか。たとへ讀むにしても、それは概ね必要な部分だけをちよつとつまみ食ひするくらの程度に止まり、豊厚なこれらの大菜に飽くことはなかつたのではないか。とんだ大言壯語になつてしまつたが、この言葉が同じ強さでわれわれ文學家にもはね返つて來ることは、私といへども十分承知してゐる。著者はいふ、遺山の文章は、これを讀む者をして史家たらしめずばやまない、と云つて云ひ過ぎであらうかと（七三頁）。ところがわれわれは、おいそれとは「史家」になり切れなかつたし、またそれでいいとしてゐたのではなかつたか。これと逆なことが、また言へる。氏はここに元遺山の逞ましい記録の營みを、常にその狂はしいばかりの金史完成への情熱を追跡しつゝ、克明に跡づけてゆかれる。「南冠錄引」に現れる一見なげない淡々たる言葉――

「百年このかたの明君賢相の後世に傳ふべき事蹟は甚だ多いが、二三十年もたぬ間に、世間では誰も知る者がなくなつてしまふであらう。予の知らぬことは何とも致し方ないが、知つてゐることを捨てて記さないでおくのに忍びようか。だから、金朝のいろいろな事をばここに附加へる。」

私はここに讀み到つて、強い感銘を受けた。一つには、戦時下の北京に於て訪れた某文人から、靜かな口調で洩らされた當時の心境と、深く相通するもののあることを直感したからでもあらう。ものを書くといふことだけが、その人に殘された唯一つの生きかたであるといふ、このぎりぎりの世界、それは決してなまやさしいことではあり得ない。かくて彼は百を越える碑銘表誌稿を書き、或は雜記を集成し、またその悲涼な心境を詩に託しつゝ、その詩が蒼勁な氣骨を失はなかつたのは、ひとへに此の激しい情熱に憑かれてゐたからであつた。それは遂に『中州集』といふアンソロジーの形式をとつた傳記集に凝集された。彼が金の歴史を殘さんために詩を借りるといふ方法によらねばならなかつた心事は、氏の抑揚に富んだ筆致によつて、美事に描出されてゐる。ただ慾を言へば要處々に點出された詩の翻譯が、この抑揚の波に乗りきつてゐない憾みがあつて、ときどき足踏みをさせられるのは私だけであらうか。

『中州集』は、文字通りの意味で、詩史である。氏は云ふそこに見られるのは詩人にして史家なるこの作者と、詩集にして傳記集なるこの著作との調和の限りない美しさである（一〇二頁）。いかにも其の通りである。第一、これが出来る以前の碑誌の撰述それ自體が、彼に於ては文學と歴史との融合であつた。既に唐の韓退之に於けるそれは、平岡武夫氏によつて美事に把握されてゐる。（『中華六十名家言行錄』。元韓二氏いづれも史家であると同時に文人であつたにしても、それを

同列において談ることは固より不可である。しかし兩者のそれぞれ在り方の違ひを考へてみることは、重要な課題の一つであらう。と共にこの點をもつと掘り下げてみることは、文史兩家にとつて甚だ興味ある仕事でもあると思はれる。今はただ課題としてここに提起しておくに止める。

『中州集』は、史と詩とが渾然と一體になつた、謂はば大建築である。それは氏の言はれる如くである。ただここに考へられて然るべきことは、先づ採録された各人の詩の採擇のしかたに、やはり詩人元遺山の好尚なり鑑識なりが相當強く裏打されてゐるのではないか、といふことである。これは『中州集』に收められた全作品を通讀すれば、誰しも感ずることであらう。このことは、『中州集』の具へる史としての性格に對して何等かの限定的意味をもつものではなからうか。詳しくは尙ほ考ふべきことである。次に、生存者を取り入れなかつたことは姑く別として（この方は房祺の『河汾諸老詩集』に一部引き繼がれてゐる）、卷十に收められた宋の遺民「南冠」の人たち、特に滕實や朱弁など金史に入るべくもない人たちが、なぜここに取入れられてゐるのか。私には腑におかない。このやうな疑問は、陳衍氏の『金詩紀事』のなかにも指摘されてゐるし（氏はこの書物を利用されなかつたやうだが、利用價值は十分にある）、また王漁洋も、既に蔡松年の小傳について批判を加へてゐる（香祖筆記）。以上のやうな點から想像すれば、『中州集』に於ける史と詩との「調和」も、その比重のバランスが元遺山によつて慎重に衡量され

た結果得られたものであらうと思はれて来る。そこに元遺山の、また『中州集』の一つの秘密が隠されてゐるやうな氣がする。それは氏の指摘される「斯文の傳統の外の世界」をはずした、女眞人に對する扱ひかたなどの問題と關聯することかも知れない。

さてこの『中州集』は更に『金史』へ飛躍せんとする。そのモメントを、氏は『中州集』に見られる調和の限界に求められた。つまり、前者に於ては斯文の傳統の外の世界を排除した結果、現實との乖離を生じた、本當の『金史』を作るためには、斯文の傳統の内と外との世界が交錯してゐるこの現實と、きびしく對決せねばならぬ。それはしかし彼にとつては「斯文の傳統を踏み外すこと、これでは史家の完全な敗北である」（二一七頁）。彼に『金史』の作れる筈はない。また實際作れずじまひに終つた。氏の結論を借れば、「遺山は川の此方の人である。だから遺山には限界があつた、といふより、遺山こそその限界であつた。なんと鮮かに割り切られた論斷であらう。これこそ史家としての冷徹な牙えと言ふべきであらう。われわれ文學の領域では、なかなか出来ないわざであつて、このやうな場合とかく思ひ切りの悪いことが多いものである——或は私だけのことも知れぬが。讀んでここに到り、私はつくづく史學者が羨ましくなつた。さきに史學と文學との調和を説きながら、いつの間にかその調和の「限界」を自ら思ひ知らされたやうな格好になつてしまつた。この邊で切り上げた方がよささうである。

實を言へば、文學の立場から批評してほしいといふ氏の依頼だつたのである。勢ひ元遺山を中心にして冗言を弄する結果になつたが、氏のこの金史研究が、今までのそれと比較して、具體的に如何なる點で出色のものであるか、實は從來の諸家の研究をあまり讀んでゐない私には十分わかつてをらぬ。史學の専門の方からも、その點について批評が聞かれることを期待してゐる。前に紹介した氏の抱負は、この元遺山と、後段の伯顔及び居庸關とに小手しらべされてゐるわけであるが、後の二篇もこれに劣らぬ美事な作品であると思ふ。ただ引用された原文の讀み方や翻譯に、承服しかねる箇處が二三あるが、これは白璧の瑕ともいふべく、もちろん全體の美を傷ふものではない。この小手しらべは十二分の成果を收めてをり、必ず引續いて本格的な野心作の出ることをわれわれに待望せしめるものである。

〔入 矢 義 高〕